


The logo for The Risk Data Bank of Japan Limited features a blue background with a network of white lines and a lightning bolt. The text "The Risk Data Bank of Japan Limited" is written in white across the center.

The Risk Data Bank of Japan Limited

【社債市場の活性化に関する懇談会WG 説明資料】

銀行融資における 信用リスクプライシング

2010年2月1日

 RDB 日本リスク・データ・バンク株式会社

代表取締役社長 大久保 豊

<http://www.riskdatabank.co.jp>

A blue gradient background with a subtle pattern of white lines and a lightning bolt, similar to the logo above.

日本リスク・データ・バンク(RDB)は、大手行・地域金融機関の共同設立による信用データベースを出発点とした、リスク管理の「絶対的なパートナー」です。独自のデータベースと最新の金融理論をもとに、信用リスク管理の高度化を通じて社会貢献します

資本主義の発展のためには、リスクを恐れず新たな事業やサービスをきり拓く、起業家精神、新興企業の勃興がなによりも重要です。しかしながら新興企業の生起の裏側には、従来企業の経営破綻、新規企業の経営失速など、企業の終焉が存在します。“企業経営の失敗”がコインの裏側として存在します。

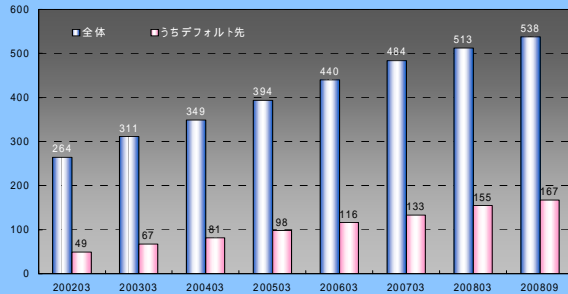
私たちは、この“企業経営の失敗”に光を見出す会社です。

リスクを恐れず新たな事業を開拓するフロンティア・スピリット、これは何よりも重要ですが、“工夫”や“計画”がない勇氣は人々をそして社会を幸せにするとは限りません。過去の企業の失敗を糧にして、より良い企業・社会を実現して行きます。
(弊社社案内より)

RDBの共同データベース

事業法人データベース

- 中小・零細企業から大企業に至るまで、国内の事業法人を幅広くカバーした国内唯一の信用データベース
- 財務状況、属性(業種、業歴など)、及び信用状態(延滞状況、債務者区分など)に関する情報を網羅
- 銀行が自らの貸出先における全てのデフォルト(債務不履行)先について、自ら収集・精査したデータを拠出



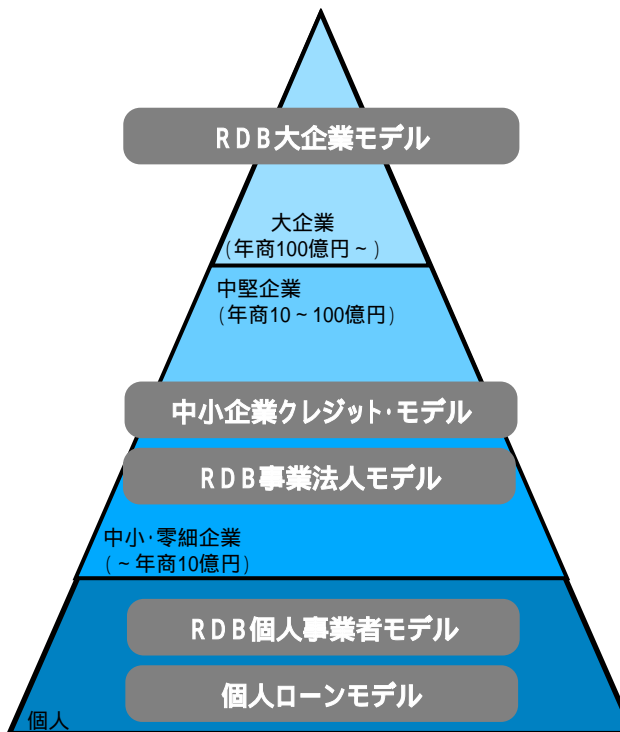
個人事業者データベース

- 個人商店から医師・弁護士、地主など、国内の個人事業者全般を対象
- 確定申告書等の情報をデータベース化、事業法人データベースと同等の精度

デフォルト債権回収データベース

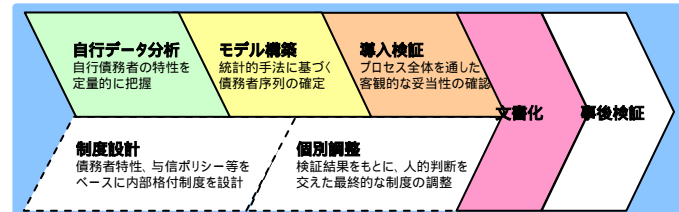
- デフォルト先における銀行貸出の回収状況を時系列で蓄積
- 信用リスク管理の最重要ファクターであるLGD(デフォルト時損失率)が計測可能

RDBの信用スコアリングモデル



RDBの各種ソリューション

内部格付制度構築・信用リスク分析コンサルティング



RDB企業デフォルト率 同 予測レポート



企業カルテ 日本SME格付け





「スプレッドバンキング」

「スプレッドバンキング」

銀行管理会計の体系的な専門書

各種リスクとリターンの理論的關係付けと管理会計処理に関する理論書。ALM会計、営業店収益会計などを網羅し、メガバンク、地銀、地域金融機関の管理会計の基本的理論として実務に活用されている。



「[実践]銀行ALM」

「[実践]銀行ALM」

日本銀行界が初めて経験する“完全自由化後”の金利上昇局面における戦略ALMに関する研究実務書
金利上昇により、あたかも心停止状態であった銀行・金融機関の資産・負債の持ち値(金利)が脈動するなか、**発生しうるALMリスクを、(顧客行動の変化)という経営環境変化をも想定した具体的な対応手法を提示する。**



「アーニングアットリスク」

「アーニングアットリスク」(EaR)

ALM・リスク管理理論に関する体系書

特に期間収益の将来確率分布モデルである“Earning at Risk”は本書により提唱され、メガバンク、地銀、地域金融機関のALMの中心的なリスク管理モデルとして実務に活用されている。



「不完全なVaR」

「不完全なVaR」

「バンキング勘定」へのVaR適用上の問題点を詳らかにし、“神聖不可侵であるかのような存在”となったVaRに対し、銀行経営主体としてしっかりと対峙し、それを「有効な部品」として創造改良する具体的な提言を行う。



「信用リスク・マネジメント革命」

「信用リスク・マネジメント革命」

“ポートフォリオ型融資”の理論的な体系書

本書が起点となり、メガバンクや地銀でのスモール・ビジネス・ローンを始めとしたポートフォリオ型融資が実現。また信用スコアリング・モデルの数理手法に関し体系的な表記を行い、日本リスク・データ・バンク(株)創設のきっかけとなった。



「中小企業格付け取得の時代」

中小企業専用格付の効用とその実際

国際的な格付け機関であるS & P社とRDB社の協業による中小企業専用「**日本SME格付け**」の効用とその実際を紹介。日本の中堅・中小企業に、より強い経営のためのソリューションを提供。



「銀行経営の理論と実務」

「銀行経営の理論と実務」

銀行経営に関する広範・網羅的な研究実務書

銀行経営理論の体系整理と信用・市場リスク管理から経費管理、自己資本管理等に関する理論書と実務実践に関する網羅的な研究書
金融現場第一線の実務者・研究者によって著された。



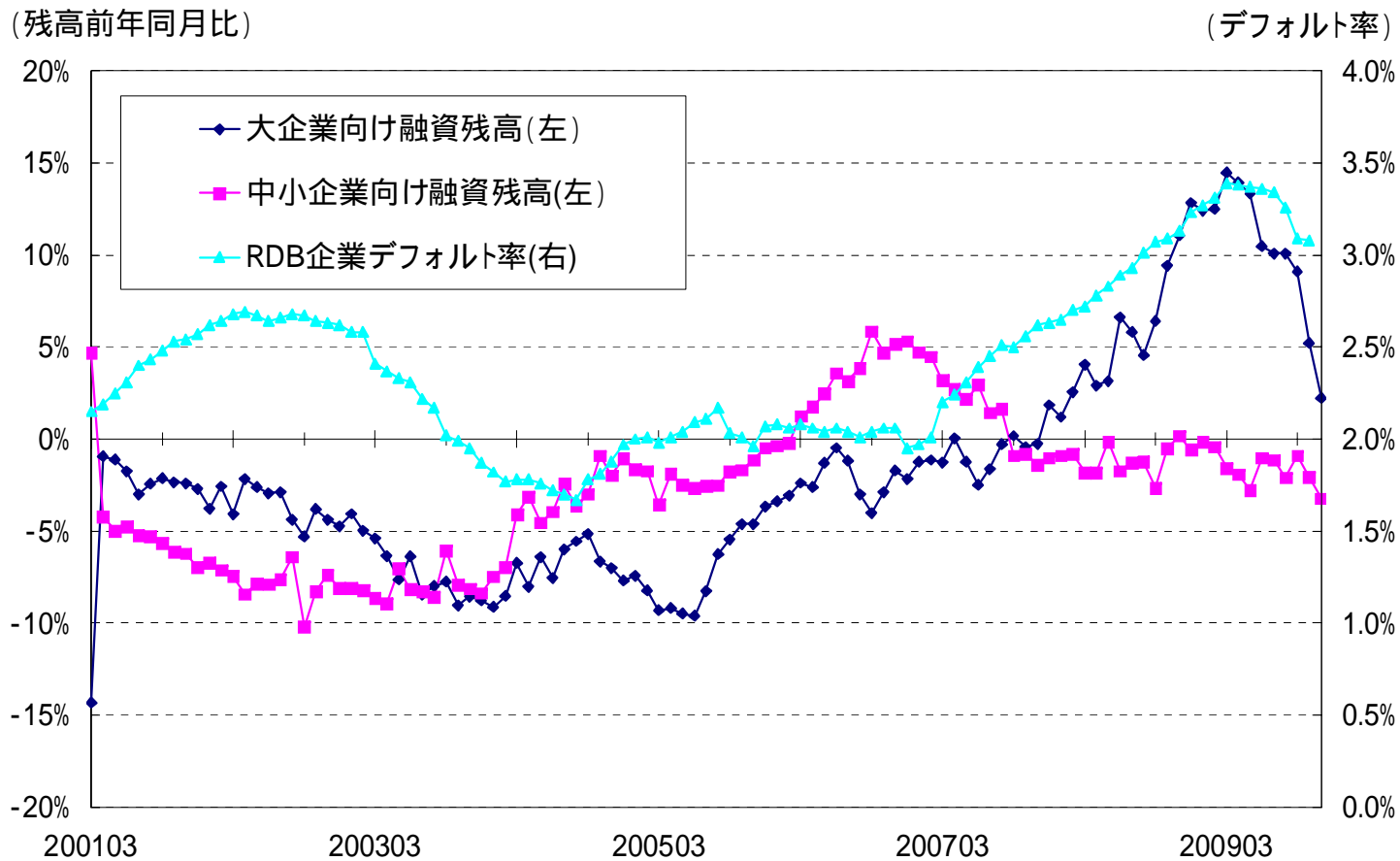
「プライムレート革命」

脱「貸し渋り」の金融システム

現在日本の“危機的な”中小企業のデフォルト状況を社会に発信すると共に、**感情的な“貸し渋り銀行批判”を廃し**、銀行の行動原理を論理的に詳らかにし、不況期にも柔軟でしなやかな中小企業貸出が生起できるよう、プライムレートに代わる「**新貸出基準金利制度の創設**」(信用プライムレート、信用スタンダードレート)をもとに、社会科学的に提案。

銀行融資の現状(デフォルト発生状況と残高の推移)

- 銀行貸出先におけるデフォルト率は2007年春より上昇を続けていたが、景気の下げ止まり、及び政府による各種の資金繰り対策等の効果もあり、2009年3月をピークに足下では低下傾向にある
- 2000年代前半のデフォルト率上昇期には銀行貸出残高も大きく減少、信用収縮と信用リスクの拡大が同時に進行していたが、今回は大企業向け融資残高がデフォルト率の動きと逆に増加、特に2008年11月以降の伸びが顕著であった



RDB企業デフォルト率

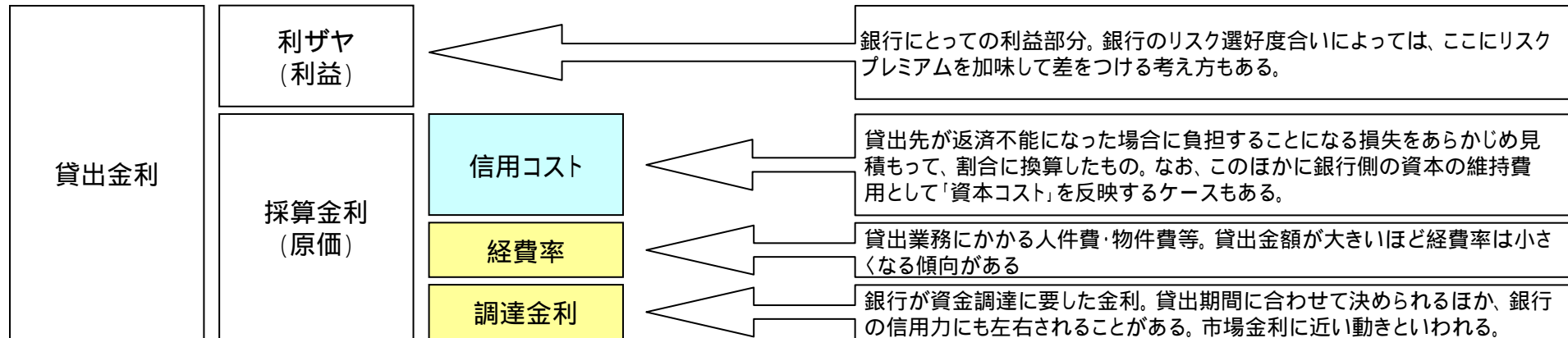
「RDB企業デフォルト率」(商標登録第5218929号)は、弊社が国内の銀行から収集している貸出先のデータをもとに、銀行貸出先におけるデフォルト事象の発生実績を、直近1年間の発生率として算出した経済指標です。2009年1月より一般に公開しており、弊社HPより取得可能です(<http://www.riskdatabank.co.jp>)。



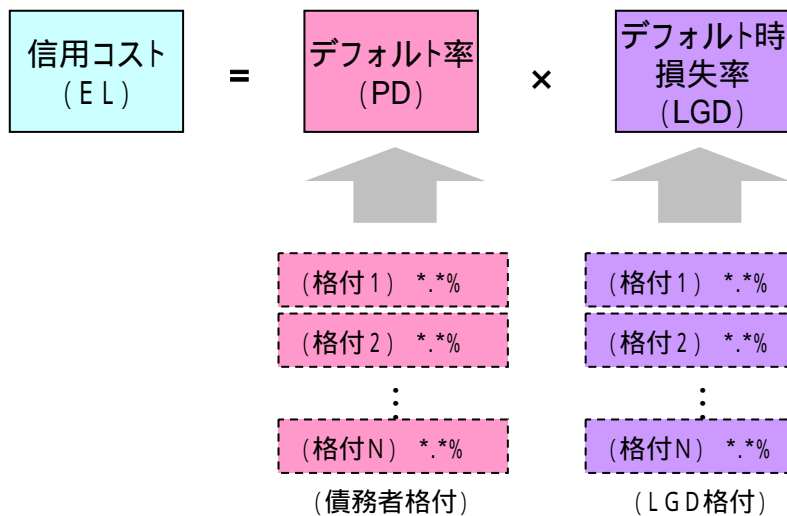
【出所:日銀、日本リスク・データ・バンク】

貸出金利の構成要素

貸出金利は、原価部分と利益部分とに分けることができ、原価部分は更に、調達原価(調達金利)、諸経費、及び貸出金利特有の信用コストに分解することができる。銀行は、可能な範囲でこれらを把握し、貸出金利を決定している。



信用コストの構成要素



信用コスト(EL)は、債務者格付別に設定されるPD(予想デフォルト率)と、LGD格付別に設定されるLGD(予想デフォルト時損失率)の、両者の掛け算によって算出される

		LGD格付			
		格付1	格付2	...	格付N
債務者格付	格付1	EL(1,1)	(1,2)	...	(1,N)
	格付2	(2,1)	(2,2)	...	(2,N)

	格付N	(N,1)	(N,2)	...	(N,N)

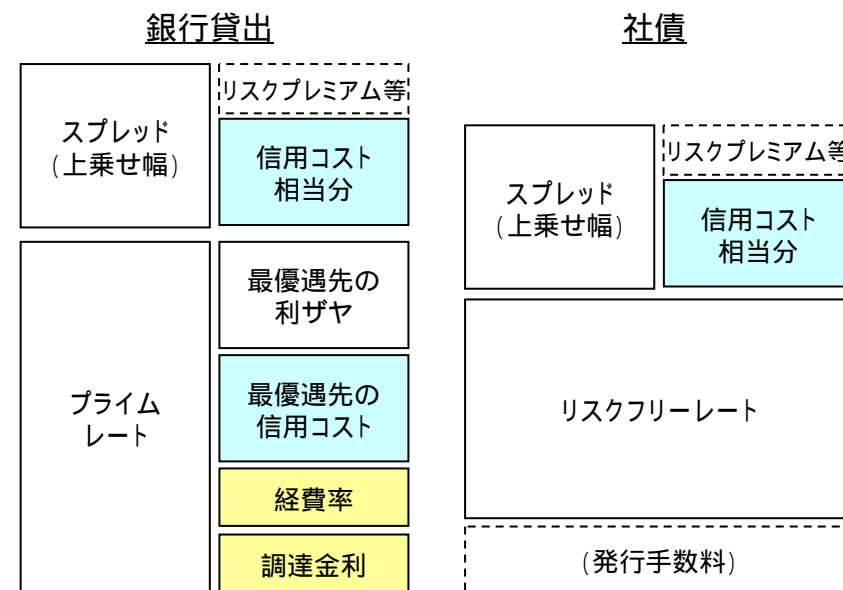
プライムレート(最優遇貸出金利)とは

プライムレート(最優遇貸出金利)とは、銀行にとって信用コストが最小の先(すなわち「最優遇先」)に対して適用する貸出金利のことであり、一般には期間1年、無担保・無保証融資の条件下で適用されるレートを指す

プライムレートの沿革と特徴

- 1980年代後半の金利自由化以降、銀行ALMの根幹を担う貸出金利の設定基準として、調達金利に連動する「短期プライムレート」(導入当初は新短プラ、新長プラと呼称された)が、価格決定機能(プライシングメカニズム)の基軸を担っている
- ALMの目下の中心は、運用と調達の「金利のミスマッチ」を精緻に捕捉し、金利にかかるリスクとリターンを最適化する運営にあり、プライムレートを基準とした貸出金利運営は、金利リスクの消化に十分な役割を果たしてきた
- 一方で、貸出業務が本源的に内包する「信用リスク」については、プライムレートを基軸としたALMの枠組みでは、これを直接的にバランスさせるメカニズムが形成されていないと言われており、1990年代後半以降の信用コストの上昇局面において問題点が指摘され始めた

金利の構成要素の違い(銀行貸出と社債)

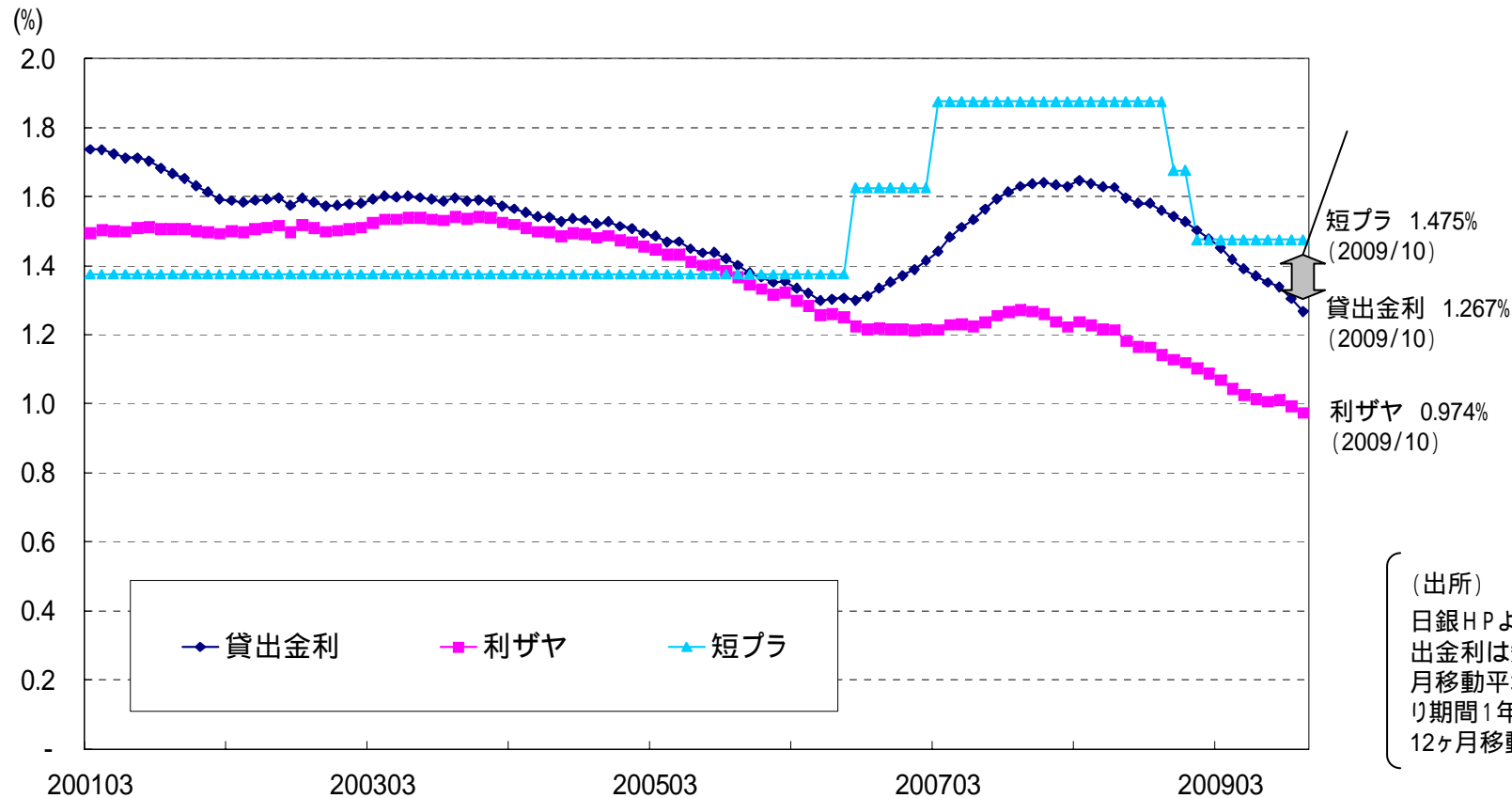


- 銀行貸出金利は、最優遇先の信用コストをベースに、債務者格付の状況(PD)、及び担保等による債権の保全状況(LGD)を加味したスプレッドを上乗せして算出される構造だが、実際には信用コストに対して硬直的な運用になっている
- 大企業向けの銀行貸出では、ベースを市場金利におく「スプレッド貸し」と呼ばれる方式も一部で存在するが、ALM管理の基準はプライム連動にある
- 社債においても同様に、リスクフリーレート(国債金利) + 信用スプレッド、という算式で金利が決定されるが、リスクフリーレートにおいては通常は信用コストはゼロである

貸出金利と採算の動向

実際の貸出金利はプライムレートを平均的に下回っており、プライムレートを基軸とするプライシングは十分に機能していない

各種金利の推移(2001/3~2009/10)



(出所)
日銀HPより。短プラは月末最低値、貸出金利は短期貸出金利の新規分の12ヶ月移動平均値、利ザヤは同貸出金利より期間1年定期預金の新規受入利率の12ヶ月移動平均値を差し引いて算出

短期貸出金利から1年定期預金金利を差し引いた概算の利ザヤ(+経費率)は、ここ10年近く一貫して縮小傾向にある
 貸出金利は市場金利の動きに合わせて直近では低下傾向が続いている
 短期貸出の平均約定金利はプライムレートを下回る傾向が続いている

調達金利、経費に加えて、内部格付の最上位格の債務者を前提とする信用コストを考慮して算出される採算金利に、目標利ザヤを上乗せした貸出基準金利

$$\begin{aligned} \text{信用プライムレート} &= \text{調達金利} + (\text{経費} + \text{利ザヤ}) \\ &+ (\text{最上位格のPD} \times \text{無担保・無保証先のLGD}) \end{aligned}$$

(案件格付制度が正しく機能しているケースにおいては、「案件格付(Loss Severity Rating)」の最下位格におけるLGDとなる)

【ポイント】

- ✓ 従来のプライムレートにおいてあいまいな「最優遇」の定義を、「内部格付の最上位格」向けの無担保・無保証債権と明確化
- ✓ 信用リスク計量にて定量的に把握されるPD、LGDパラメータを正しく反映してプライムレートを算出する
- ✓ 「アンダープライム」といえども採算を割ることの無いよう、採算金利と利ザヤ部分を明確に分けて管理する
- ✓ 算式、及びパラメータを一般に利用可能とすることで、借り手・貸し手双方における金利の共通尺度として機能

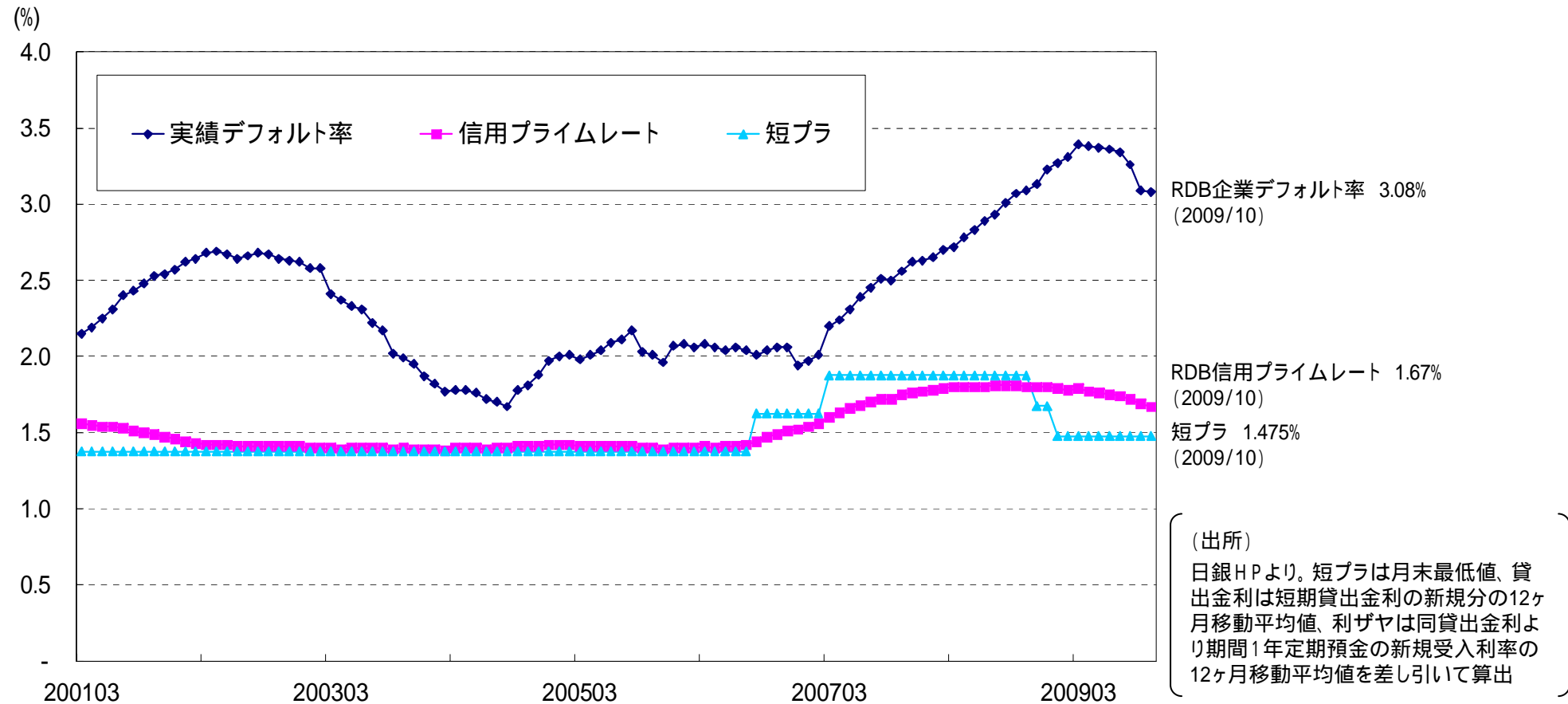
実際の算出結果(2009/10の事例)

$$\begin{aligned} \text{信用プライムレート} &= \text{調達金利} + (\text{経費} + \text{利ザヤ}) \\ &+ (\text{最上位格のPD} \times \text{無担保・無保証先のLGD}) \\ &= 0.29\% + 1.3\% + (0.14\% \times 54.5\%) \\ &= \mathbf{1.67\%} \quad (2009/10時点 \text{ 現行短プラ: } 1.475\%) \end{aligned}$$

プライムレートの理論値と実績値

現状のプライムレートは理論上の水準(信用プライムレート)を下回っており、銀行は構造的な逆ザヤに陥っている

理論上のプライムレートと実績デフォルト率(2001/3~2009/10)



- デフォルト率の実績値は3%を超える高水準にあり、銀行貸出における信用コストの圧迫要因となっている
- PD、LGD等の実績値を勘案した理論上のプライムレート(後述)は、実際の短プラを上回って推移しており、短プラを下回って推移する実勢金利との比較での乖離はより大きく、銀行貸出の採算悪化が懸念される

• 信用コストの動きを考慮していない金利設定

- ✓ 現状の貸出金利は市場金利には連動しているが、デフォルト率、回収率といった信用コストの変動がプライムレートの算出上は十分に考慮されておらず、デフォルト率上昇局面では特に、信用コストの「価格転嫁」が進んでいない

PD、LGD計測の高度化と、プライムレートへの反映プロセスの構築が不十分

• 「最優遇」とは名ばかりのプライムレート運営

- ✓ 実際の短期貸出の金利の平均はプライムレートを下回っており、プライムレートは「最優遇先」への貸出基準金利として機能できていない

貸し出しの現場においては、「取引総合採算」の名目のもとに融資単体での採算を軽視する傾向にあり、大企業向け融資であればその傾向はより顕著にあらわれる

• 各行一様な審査基準による「商品差別化要因」の喪失

- ✓ 金融検査マニュアル、バーゼル 等の「汎用的な」信用リスク管理基準の浸透により、各行による審査基準が債務者のBSの健全性・流動性重視の方向に進むことで、審査手法の独自性、多様性が薄れ、結果として(金利)価格競争以外に商品差別化要因が見当たらなくなっている

どの銀行も同じ信用リスクの見方をするため、極端な低金利、または単純な謝絶に結論が二極化(従って、たとえ「オーバーバンキング」であったとしても、貸さないときは誰も貸さない)

銀行融資と社債の違いのまとめ

目下の「カネ余り」「低金利」環境で、かつ危機の記憶が生々しく残る金融市場においては、借り手、銀行の双方にとって、社債よりも融資のメリットが大きいと考えられる

	銀行融資	社債	
			…優位なポイント
金利の構成要素			
信用コスト	ダンピングが可能	(市場が決定)	銀行融資の金利決定メカニズムにおいては、取引総合採算の名目で、信用コストが小さく見積もられている可能性がある
調達金利	預金金利	(市場金利)	店頭預金という固有の調達チャンネルを有する銀行融資のほうが選択の幅が広い
経費率	(高い)	低い	銀行融資に特有の要素
(資本コスト)	低い	(高い)	取引先が大量に分散している銀行ポートフォリオのほうが、限界的に負担する信用VaRのコストが小さい
貸し手にとっての流動性	(満期保有)	売買可能	社債のほうが資金供給者にとっては流動性が確保されているものの、目下の預金超過の銀行にとって大きな魅力ではない
借り手にとっての機動性	相対の交渉	(市場が決定)	リーマンショック時のような危機に際しては、市場から資金が蒸発することがあり、相対取引の銀行融資に安心感がある

本件に関するお問い合わせのほか、データベースを用いた各種分析、信用リスクに関する調査研究などは、弊社事務局(担当:尾藤)までご連絡ください。

日本リスク・データ・バンク株式会社

〒105-0011 東京都港区芝公園1-8-21 芝公園リッジビル9F

TEL:03-5425-2331 FAX:03-5425-2332

E-mail:jimukyoku@riskdatabank.co.jp

<http://www.riskdatabank.co.jp>

本資料に記載されている内容は、平成22年2月1日現在のものであり、将来予告なく、変更或いは改訂されることがあることをご了承ください。

なお、本資料につきましては、作成時点における弊社の見解を示しており、その作成においては弊社保有のデータベースその他、弊社が信頼に足ると判断した情報に基づき正確性を期しておりますが、その完全性を保証するものではありません。